

## 研究開発課題中間評価結果

事業名（年度）	ワクチン開発のための世界トップレベル研究開発拠点の形成事業 （令和4年度～令和8年度）
研究開発課題名	ワクチン開発のための世界トップレベル研究開発拠点群大阪府シナ ジーキャンパス（大阪大学ワクチン開発拠点）
代表機関名（所属 役職）	国立大学法人 大阪大学（先端モダリティ・ドラッグデリバリーシ ステム研究センター・特任教授）
研究開発代表者名	審良 静男

**【総合評価】** 良い

### 【評価コメント】

大阪大学には、本シナジー拠点をはじめ、感染症分野に関連する複数の研究所・センターがあり、多くの優秀な研究者が在籍している。これらの研究・産学連携基盤を活かして、拠点としての体制を整備している。

基礎研究における大きな潜在力を有しているため、研究のリソースや成果を有機的に統合活用することができれば、拠点として新たなモダリティの育成など、独自性の高いワクチンを創製しうる可能性を持っている。拠点としての方向付け・研究者への意識付けなどにより、その潜在的な研究開発力を引き出し、ワクチン開発戦略を再検討することを期待する。

独自の脂質材料であるssPalmoを成分とするLNPを用いた高病原性鳥インフルエンザ（H5N1）に対するmRNAワクチンが「ワクチン・新規モダリティ研究開発事業」に採択され、当該モダリティのプラットフォームも目指して複数のワクチン抗原とDDS技術を組み合わせた研究開発が進められている。当該モダリティの優位性の確保・維持には相当な努力が必要であり、戦略的に進める必要がある。

ワクチンの開発や生産・販売で豊富な経験を有する多くの企業が本拠点と連携しているが、それらの企業の研究開発力やノウハウを十分に引き出しているとはいえない状況である。今後、各企業とワクチンの実用化に向けた連携の具体化を進めることが必要である。

本事業は感染症有事を見据えた迅速なワクチン開発に資することが目的であり、各拠点で研究開発を進めているワクチンシーズについては、最終的な実装化を意識したタイムラインを設定し、迅速に開発が進むように拠点内で優先順位を明確にして戦略的かつ効率的な研究開発マネジメントを行うことが求められる。

基礎研究に留まらず、ワクチン開発を成功させ、上市されることを視野に入れて本事業を推進してほしい。また、「新規のワクチンを国内で短期間に実装するという最終目標に基礎研究の側面からどのように関わるか」というゴールを見失わないように拠点運営を進めてほしい。

以上